



純  
真  
戦  
士

# キューティ フェイス バンド

触手の魔悦に魅入られて

小説 木森山水道

挿絵 いぬ

立ち読み版

プロローグ

第一話 女子校生ふみなの告白

010

第二話 純真戦士キユーティウインドの誕生

021

第三話 屈辱と牝悦の初敗北

071

第四話 見ず知らずの中年に身体を許す夜

111

第五話 マダコ怪人の陵辱によがる変身ヒロイン

151

第六話 女子校生の墮落を深める4P

184

第七話 帝王の欲望に孕んで堕ちる

207

第八話 出産乱交の変身ヒロイン母娘

233

エピローグ

255

## 登場人物紹介

Characters



ふみな

／キューティウインド

明るく前向きな性格の女子校生。一万二千年前に栄えたアトランティス大陸の民の末裔であり、【アトランティスの力】によって純真戦士キューティウインドに変身する。

ムウア

かつて地球の征服を目論んだアトランティス人。同胞たちに宇宙の果てへ追放されたが、生き延びていた。【アトランティスの力】で、人とは思えない姿になっている。

ゆうと

ふみなの幼なじみの男子校生。怪人たちと戦うキューティウインドを、ふみなの母親と共にサポートする。



ふみなが怪人が消えたと思った次の瞬間、ゆうとが後方に吹き飛んでいた。倒れている人間に何度もぶつかり、二百メートル向こうでようやく止まる。

「ゆうと！」

「死んじゃいねえよ、若い女。オレの耳に届く奴の身体の音からするに、気絶してもいないらしい。蹴られる寸前、察して自分で後ろに飛んで、ダメージを減らしたからだろう。オレをコケにするだけあつて、人間にしてはなかなかやる」

怪人はよろよろと起き上がったゆうとに向かつて、足を踏み出した。

「さて、死なない程度に鬩なぶってやるか……女ふたりに言っておくが、あいつが使った奇策はもう通じないぞ。オレはもう油断しねえ」

歩みを止めて半身だけ振り返った怪人は、赤くギラつく目でふみなとレポーターを射る。

「ひいっ！ し、しませんっ、私はあなた様の従順な犬ですうっ……！」

抵抗心がすっかり挫けてしまったらしい。女性は土下座し、泣きながら頭を下げている。

「くっ……！」

心をすくませる恐ろしい眼差しに、ふみなも怯んだ。

しかし、反骨心は失っていない。

恐怖は間違いないがあるが、それ以上に恋人を想う気持ちがあつた。

（どうすればいいの？ どうすれば助けられる？ ……このままじゃ、ゆうとは……！）

恋人が痛めつけられる。もしかしたら、それだけですまないかもしれない。

ゾツとする未来を想像するだけで、怪人に与えられたもの以上の恐怖を覚える。それと同時に、絶対に実現させて堪るかという強い気持ちも湧いていた。

（でも、気持ちだけじゃどうにもならない……人間なら、急所のこめかみを靴でぶん殴れば相当効くだろうけど、あいつにも通じるかな……そもそも、あたしよりもずっと運動能力の高いあいつに、当てられるの？）

妙案を考えようと必死に頭を回転させるが、いいと思える方法が浮かばない。

「ええい、ままよ！ 指を啜えて見てるより、ダメ元でもやってやる！」

決意して、靴を強く握りしめる。そのときだった。

「正義の怒りが沸騰してきたわね。その気持ちがあいつを倒す力になるわよ、ふみな」  
不意に、耳元で声があった。

まだ土下座している女性レポーターのものではない。

聞き覚えのある、よく通る声だった。

「ひよっとしてママ!? ど、どこ……どこにいるの？ あたしには見えないわよっ」

この場で起きているのは、自分と女性だけ。

そう思っていただけに、驚いたふみなは慌てて周囲を見渡した。

「その場にはいないわ。今は家の研究室よ。音声だけを送っているの。今つけているリボンは、わたしがプレゼントした物よね。実はそれに、ナノサイズの機械を仕込んでいたの。それを使ってそっちの音声と映像を拾って、同時に声を届けている寸法なのよ」

「そうなんだ。あたし、リボンにそんな仕掛けがあるなんて、ぜんぜん知らなかった……それにしても妙に元気ね、ママ。体調は平気なの？」

「寝不足で喘いでいる場合じゃないもの。だって、このときのために、研究してきたのよ？言ってみれば晴れ舞台ね。この状況で言うのは不謹慎だけれども」

いつもは寝不足の太い声ばかり出している母は、元氣澁刺に言ってくる。

「そうか……ママはこのときのために研究していたのね……話は本当だったんだ」

妄言とばかり思っていた母の主張が、まさか絵空事ではなかったとは。

ふみなは驚き戸惑ったが、同時に気持ち明るくなるのを感じた。

「自信があるようだけど、もしかして、なんとかなるの？ ゆうとを助けられる？」

「当たり前よ。さあ、ふみな。わたしの教える言葉を叫びなさいっ」

自信たっぷりと言った母は、さらに続ける。

「正義の怒りに燃えて質が高まったあなたの心……あなたがゆうとくんにもらって大事にしている腕時計に密かに仕込んでおいたアトランティスのオーバートクノロジー……そして、あなたの遺伝子に刻まれた【アトランティスの力】が真価を發揮するわ。具体的には、人間を超えた変身ヒロインに進化するのよ！」

「わかったわ、ママ！」

実のところ、今では恋人になったゆうとの贈り物に、いつの間にか勝手に細工をしたこととに文句を言いたかったし、母親の非常識な言葉に一言二言叫びたい衝動に駆られた。

だが、ふみなはすべてを呑み込んだ。

「待っててゆうと……今助けるわ！」

母の言葉はとても信じられないが、今はすぎるしかない。

でなければ、誰よりも大切な恋人が恐ろしい目に遭うのを止められないのだ。

自慢の聴力で会話が聞こえていたのだろう。

ゆうととの距離をあと五十メートルほどに詰めていた怪人が振り返った。

訝しげな色を浮かべた赤い目で、じつとこちらを見てくる。

ふみなは決意を込めた目で睨みながら、嬉々とした声で母が伝える言葉を叫ぶ。

「グローイング・ブリーズ！」

すると、アスファルトから強い風が吹き付けた。

上昇気流は清浄な青い光を帯びていて、ふみなを丸ごと包み込む。

「なんだと！ まさか……【アトランティスの力】を使いこなしているのか！」

怪人が驚愕する中、ふみなのポニーテールの黒髪が変わった。見るだけで胸の空く青色に変化した髪は四房に分かれ、微細に伸びた前髪は横一列に綺麗にそろろう。

衣装も変化していた。

母がいつの間にか通信機にしていたリボンも、両端に純白の羽がついたカチューシャへ。

半袖のブラウスと制服のスカートは水色のツーピースに。

ひととき強い風が両手足を撫でた瞬間、青い粒子が集まった。女子校生の柔肌は、ロン

ググローブとニーハイソックスに包まれて、艶めかしくも勇ましい戦士の四肢に変わる。

「地上を輝かせる青き風……純真戦士キューティウィンド！」

カチューシャは引き続き通信機の機能を果たしているらしい。

聞こえてきた母の指示に従って、ふみなは今にも羽ばたきそうなポーズで見得を切る。

「うわあ……あたし、本当に変身しちゃった……でも、アトランティスとか怪人とか、非常識なことが押し寄せてきてるんだから、これくらいはいっか。ゆうとも助けられそうだし」

自分の身体を見回しながら、誰にともなく呟いた。

まるで空気になってしまったかのように、肉体に重さを感じない。

しかも、今まで経験したことがないほどの力の充実を覚えた。内から湧いてくるもので身体が爆ぜてしまいうさだげれども、とびきり爽快に心身が滾っている。

「今行くわよ、ゆうと……えいっと」

根拠はないが、少なくとも憎たらしい怪人くらいには強くなっているのではないだろうか。

ゆうとの大声を聞かされて飛び上がったのは、反射的な行動のはず。

ならば、同じくらい強い自分なら、意識して少しジャンプするだけでゆうとの側まで行けるに違いない。

そう思っつて、ちよつと跳躍したつもりだったのに。





「うわああああ、ストップ、ストップう！」

ドガァン！

飛んだ次の瞬間、恋人がいる地点のずっと後ろのビルの壁が視界いっぱい広がって、止まる間もなく激突してしまった。

「ああ……びっくりしたあ………あとで謝って弁償しないと」

コンクリートの壁にめり込んだふみなは、すぐに後ずさりして抜け出した。

「それにしても、今のあたしつては、ジャンプ力がスゴイだけじゃないのね。あんな勢いで壁にぶつかったのにぜんぜん痛くないわ。むしろ壁のほうが悪れちゃってる。とんでもなく頑丈になってる……肌はフツツに柔らかいのに」

二の腕の筋肉を軽くつねりながらひとりごちるが、すぐに表情を引き締めた。

飛んでいきすぎでは意味がない。

変身ヒロインは、さらに力を抜いて跳躍。すると今度は、恋人の側に着地していた。

「変身するのは見ていたけど信じられない……ふみな……なんだよな……？」

「ええ、そうよ。あたしはふみな。でも今はキューティウインドでもあるの」

にっこり微笑むと、ゆうとはほっとした顔になった。

「その顔……その目つき……間違いないふみなだ……お前、すごく変わったんだなあ」

「えへへ……でもほとんどママのお陰よ。あとで詳しく説明するわね」

「ウオオオオオオッ、面白くなってきやがった！ 予定は変更だつ。ムウア様に相応しい女

かどうか、お前から試してやるっ」

キューティウインドが指先で鼻の頭を擦ったとき、怪人が突進してきた。

「来なさい！ ゆうとを痛めつけたり、女性に乱暴するあんたなんかやつつけてやるわ！」  
襲ってくる怪人の殺気が和んだ気分を吹き飛ばし、もともとあった熱い感情に火をつけた。

暴虐な怪物への怒りに燃える変身ヒロインは、怪人に向かって駆けだす。

変身前はぜんぜん見えなかった敵の動きだが、今はコマ送りみたいにはつきり見えた。

「ウオラアッ！ 同じ四足歩行仲間の馬なんか目じゃねえ、オレの蹴りを受けてみる!!!」  
怪人は間合いに入るなり、横っ腹めがけて蹴りつけてきた。

「セイツ！」

身体を開く予備動作で狙いを察したキューティウインドは、怪人よりも一段早く身体を動かした。渾身の力を込めながら、硬い毛で覆われた足首をブーツの爪先で蹴り抜く。

効果は抜群だった。怪人は大きく体勢を崩し、軸足だけでコマのように回る。

「ウオオッ！ オレよりも早くて重い蹴り……犬を超えた犬のオレの脚力を上回った?！」  
回転ドアみたいに回る怪人は、アスファルトとの摩擦で煙を上げながら驚愕する。

「ハアアアッッッ！」

キューティウインドはさらに攻める。

敵の足を蹴りつけた勢いも乗せて半回転。蹴った足を軸足に切り替えるなり、ブーツの

踵で毛むくじやらのこめかみを打つ。

「回っていた怪人は、先ほどキューティウィンドがめり込んだ壁まで吹き飛んだ。突き抜けた先の事務室の机と椅子を巻き込んで、ようやく止まる。」

「やっぱり、自分の手足で蹴ったほうが、靴でぶん殴るより気持ちいいわね……それにしても、あたしつてば、ほんとにスゴくなってる。今の動き、まるでテレビの格闘家みたい」  
「キューティウィンドのコスチュームには、古今東西の武術の達人のデータがインプットされているの。それに基づいて、あなたの動きは最高に効率のいいものになっているのよ」  
カチューシャ越しに母が得意げに解説してきた。

「へえ、便利なねえ。こんなものを作ったママは本当に素敵だわ」

「ありがとうふみな。でも、まだまだこんなものではないわ。経験を積むほど戦闘時のあなたの動きは最適化されていくし、【アトランティスの力】を高めて使いこなす能力も磨かれていくの。つまり、戦うほどあなたは強くなるのよ」

熱弁を振るう母に耳を傾けていると、怪人が壁から這い出てきた。

「や、やるじゃねえか……だが、オレは負けん……ムウア様のしもべとして……」

ふらふらしているが、搾り出す声と目には殺気めいた気迫が孕んでいる。

きつと、まだまだ戦うつもりなのだろう。

「戦意は衰えていないようだけれど、力はだいぶ弱まっているようね。フィニッシュアップ……いえ、浄化技で決めるわよ、キューティウィンド！」

「え、浄化技？」

「怪人を浄化すれば、あいつから常時放たれている波動で眠らされて、光にされた記憶を盗み見られている皆が目覚めるし、怪人と融合してしまっている犬が元に戻るわ」

「うそ、そんなに都合よくいくの!？」

「都合よくいくのよ、キューティウインド！ さあ、浄化技よ。指示に従って！」

「うん、わかったわ！」

変身ヒロインは、肩で息をする怪人を見据えた。

「ムウア様のしもべであるこのオレを舐めるなよ……!」

一度どつしりと仁王立ちした怪物は、今までで最高の速さで襲いかかってきた。

「負けないわよ！」

見た目も力も凶悪な怪人が全力で向かってくる。

いくら超人的な力を手に入れたとしてもキューティウインドの中身は、ただの女子校生。

怖くないわけがない。

しかし、怖がってばかりではなんにもならない。

怪人が行う理不尽への怒りをぶつけるにしても、大切な男子を守り、彼や母との愛しい日常を取り戻すにしても、勇気を出して戦うしかないではないか。

「駆け巡れ、浄化の風！ リクリエイト・ブレス！」

通信機からの母の指示に従って、突き出した両手でハートを描き、それを飛ばすイメー

ジで勢いよく両手を突き出す。

すると、宇宙に描いた青いハートから、無数の粒子を乗せた大風が吹いた。

天の川を連想させる光の奔流は、瞬く間に怪人を包み込んだ。

「ウオオオオ……グフフ……オレの負けか……しかし、オレは少しは役目を果たしたぞ……キューティウィンド！ 貴様はムウア様のっ」

怪人の遺言めいた台詞は、無音の光の爆発で途切れる。

霧が晴れるように光が消えると、そこには取り込まれた犬が倒れていた。

どうやら無事らしい。犬はすぐに目を覚まし、飼い主のもとへと駆けていく。

「あ、どうしてかわからないけど、あたしや怪人が突っ込んだビルの壁もオフィスも元に戻ってるわ。弁償しなくてすんだわね……あの犬だけじゃなく、皆も目覚めだし、一件落着つてところかしら」

すべてが元通りになっていく様子を見ながら、キューティウィンドがにっこり微笑む。

「壊れた物は、怪人が浄化されるときに解放されるエネルギーで元に戻ったのよ。人々が目覚めたのは、さつき説明した通りよ」

説明するのが嬉しいらしい。母は嬉々として言ってくる。

「今のあなたを見られたら面倒よ。ふみな、ゆうくんを連れて家に帰ってきなさい。その場はもう、あなた抜きでも大丈夫。あとはボランティアとか行政とかがしてくれるわ」

「わかった。すぐに帰るね」

ひとり、またひとりと目覚める中、ゆうとの側へジャンプする。

「大丈夫、ゆうと。怪我は？ 痛いところとかはある？」

「平気だ。蹴られたのはちよつと効いたけど、食らったのはあれだけだ。お前が助けてくれたからな。ありがとうな、ふみな。いや、キューティウインドか。よくやったよ」

「えへへ……そう言われると嬉しいなあ……怖いのを我慢して頑張つてよかったあ」

恋人の笑顔混じりの<sup>ねぎ</sup>労いは、大切な日常が戻ってきたという実感を強く印象づける。

自然に笑みがこぼれるくらいに嬉しかった。

「ちよつとの間、我慢してね。変身ヒロインの力で、このまま逃げちゃうから」

あまりのんびりしていられなかった。

人々が目覚めだしていることもあるが、自分たち以外では唯一健在だった女性レポーターが、必死の形相でカメラを担ぎ、破られた胸元を空いた腕で隠しつつ、突進してくる。

怪人にひれ伏していた彼女だが、もう回復し、仕事に取りかかっているらしい。きつと、自分にインタビューをするつもりなのだろう。

「この格好は男にはキツイけど、あのレポーターに捕まって、面倒事になるよりはましさ」  
お姫様抱っこされたゆうとが苦笑いする。

途中でふたりの鞆を回収したふみなは、ビルの屋上を軽やかに飛び移りながら、騒がしくなり始めた駅前から遠ざかった。

「ふむ、こうして奥まで来てわかったが、どうやらキューティウィンドの子宮口は、完全に膣の奥にあるわけではないのだな。普通の女よりも少し前気味だ。なるほどなるほど」  
 まるで頷いている様子が見えるような声音で怪人が言う。

「それにしても、なかなかこなれた粘膜だ。これはそれなりに経験を積んでいるオマンコだぞ。ウツウツツ、しかも貪欲じゃないか。挿入中は、まるで抵抗するように締まってきたが、奥まで征服した今では、敵の触手にもかかわらず、嬉しそうに食いついてくる」  
 触手がゆっくり戻っていく。

「はあ……はあ……やっとな出ていく気になったのね……？」

「そんなわけがあるか。オレはこれから、お前の望みを叶えてやるのだ。そうすることが、ムウア様よりいただいた使命を果たすことにもなるからな」

触手は完全に抜ける寸前で止まると一拍置き、膣内を再度割っていく。

「くうっ……あたしの望みは、あんたの浄化よ……はあ……はあ……」

（うう、触手のうぶ毛があたしのアソコのお肉と擦れてる……つうう……感じちゃうッ）  
 奥まで満たしたら抜ける直前まで引き返し、その後また奥まで押し入る。

まるで男がピストンするような運動は繰り返され、しかも徐々に速度が上がっていく。

「こんなのいやよ……はあ、はあっ……あたしが楽しみにしていた初めてを奪った憎たらしい触手とエッチしてるみたいじゃないの……あっ、はああ……ああア、あうう……！」  
 繊細なうぶ毛は、何度も何度も膣肉の隅々と擦れあう。



おおぎつぱなキノコ形の恋人のペニスでは決して触れられなかった部分すら刺激する。触手のブラッシング愛撫は、恋人との情事で開花し始めていた、快楽享受の器官としての自覚を強固にし、より淫らで貪欲な肉塊へと開発していく。

「やだ……あたしの中の触手……あッ……はあアッ……あアッ、あアッ……ど、どんな熱く硬くなっている……まるで人間のペニスみたいじゃないのっ……ううっ、あふっ、あううッ……こんな風になつたらますます……」

危惧した通り、触手に犯される快感が濃密になっていく。

勃起ペニスじみた触感、肉紐と膣肉を急速に馴染ませており、人間では不可能なブラッシング愛撫の愉悦を大きくしていた。

うぶ毛と膣ヒダが擦れあう度に、目の前で白い火花が散る。

丸い先端で奥を突かれたときには、癖になりそうな胸の詰まりを覚える。

「このままオーガズムまで導いてやる……そのあとに、仕上げの一撃をたっぷり食らわせてやる。人間の生殖器などという劣った器官のことは忘れさせてやる。触手大好きヒロインに生まれ変わるがいい」

「ふざけないでっ！ ああッ、アアッ、あッ！ お、思い通りになるものですか……！」  
一生懸命怒鳴りつけるが、触手はお構いなしにピストン速度を上げた。

肉紐の輪郭に沿って広がる陰唇から大量の愛液を掻き出しつつ、最奥をドスドス突く。繊細なうぶ毛に媚肉の隅々を擦られるのも、区切りとばかりに子宮口を押し上げられる

のも、意識が遠くなるほど気持ちがいい。もしも相手が恋人で、手足が自由だったなら、しがみついて腰を振っているとところだろう。

（このままじゃ本当にオーガズムに導かれちゃう……ゆうととシても、まだイッたことはなかったのに、初絶頂さえも奪われちゃうの？ 敵の怪人に犯されているのに？ そんなのゆうとへの酷い裏切りじゃないっ……女として惨めすぎるわ）

恋人との満足のいく性交でも、実はオーガズムには至っていない。

母の解説によると、絶頂寸前まで昂っているらしいが、達したことはまだ一度もない。

恋人と一緒に至高の瞬間を味わうことは、彼の勃起で膣の隅々を満たされる日と同じくらい、楽しみにしていたものだということのに、それすらも怪人に踏みにじられるのでは酷すぎる。

（イクもんですか……耐えてみせるわ……!）

キューティウィンドは、憎い怪人の腹の内側——粘液でヌラヌラ光る柔突起の壁を睨みながら、思い切り歯を食いしばった。

大切な恋人の顔を思い浮かべて、性感を意識から追い出そうと躍起になる。

「ウツウツウツ！ 耐えようとしても無意味。閉じ込められてから今まで、思い通りになったことは一度でもあったか？ ここはオレの支配領域。すべてのものが無力なのだ！」  
乳房の外側で待機していた触手が動いた。

まるで磁石みたいに吸着しながら、汗ばんだロケット型の巨乳に螺旋状に巻き付く。

「はああああッッッ！ はあ、はあ、ああっ……うそ、ま、また胸をつ……!?!」  
締め上げたかと思えば、ふっと力を抜いて緩めてくる。それを何度も繰り返す。

人間が驚づかみして揉むような責めは、乳房全体を燃え上がらせた。締め付けられるときの甘く切ない切迫感、緩められるときに覚える安堵感。性質の違うひとときを繰り返されるほど気が遠くなり、意識が乳悦で塗りつぶされる。

「あっ、あっ、ああ、しかも、乳首と乳輪まで……アア、ああアア……ッッッ！」  
触手の魔手は、やっこのことでおねだりを我慢した中心にも及んだ。

乳房を責める触手の先端がブラッシング愛撫を行い、乳悦をより濃厚にする。

乳輪の肉が浅く沈み込む強さでうぶ毛に擦られると、気絶しそうな乳悦が迸り、胸元が勝手に躍ってしまう。膣ヒダと同じくらい敏感な乳首も、表面だけを研磨する女泣かせの絶妙の力加減で責められているので、喘ぎ声は高くなる一方だ。

（耐えなくちゃ………オーガズムまで教えられるなんて、絶対に避けなきゃ……!）  
貞操を守りたい気持ち総動員して自分を叱咤する。

だが、心はともかく、既に陥落気味の身体はどうしようもなかった。

抵抗の意思を込めて吊り上がる眉目も、歯を食いしばる口元も、徐々に力が抜けていた。前者は悩ましいハの字を描き、後者はパン食い競争に必死な幼児のように大きく開き、透き通った嬌声を響かせている。

とても、悪事を働く怪人を颯爽と退治する変身ヒロインの姿ではなかった。

今のキューティウインドは、触手責めに敗北して迎えるオーガズムへのカウントダウンに入った、ただの絶頂確定女でしかない。

「とどめだ、キューティウインド！ 敵の触手で女の最高の快楽を味わえ！ 触手の素晴らしさをその身に受けて、牝を喜ばせる能力が劣った人間など見限ってしまえい！」

怪人の獯猛な叫び声が響き渡った。

瑞々しい巨乳に螺旋状に巻き付く触手が、ひときわ強く締め上げてきた。隙間から乳肉がはみ出すと同時に、ブラッシングされながらしこりきった乳首を弾かれる。

胸だけでなく頭の中まで痺れる悦楽で、顎を跳ね上げてしまったとき、恋人よりもずっと力強い突き込みで、深々と串刺しにされてしまう。

「ああっ、いやあっ、あっ、なにこれッ、ひい、ひいひい、にゃにこれえええ〜〜  
〜!!!」

思い切り貫かれて絶頂した瞬間、キューティウインドの瞳から光が消えた。

憎らしい怪人の代わりとばかりに、柔突起の壁を睨み続けていた目の端は、それが嘘だったようにうつとりと下がっている。抵抗の言葉を放ち続けた口からはだらしなく舌がはみ出し、完全に呂律が回らなくなっていた。

「こんなにやのしらないっつ！ ゆうほとのエッチでも、けいけんしてにゃいいい!!!」

女が貪れる快楽の奥深さを怪人に教えられてしまった悔しさと、陵辱される前に教えてくれなかった恋人への恨みの混ざった絶叫が迸る。

もう、取り返しがつかない。

こんな快楽を忘れられるわけがない。

きつと、恋人とセックスするときは比べてしまっただろう。

怪人の触手は、性交の機能の面で人間よりも勝っていると認めざるを得ない。

彼が届かなかつた子宮口をあつさり蹂躪し、彼が与えられないでいたオーガズムを味わせてくれたのだから。

ならば、自分は必ず思つてしまふに違いない。

思つてはいけない浅ましいことを。

「いやあつ、いやいやいやいやアツ！ もうやめてつ、あたしをきもひよくしないでエ！ これいじよう、あんたのことをあたひに刻みつけないれエ!!!」

オーガズムで全身が心地よく痺れる中、変身ヒロインは金切り声で情けを乞う。

汗ばんだ髪を振り乱していやいやと首を振り、一生懸命、快楽を拒絶する。

「ウツウツウツ！ この嘘つきめ！ 嫌だ、もう犯すなど言う割には、すごい締め付けだぞキューティウインド！ 少なくとも、イカせてもらえて身体は大喜びだ……オオツ、締め付けると同時に、ヌルヌルの肉が吸い付いてくる……オレの先っぽが、コリコリの子宮口に思い切り吸われるッ……おお……これはいい、最高に気持ちいい……オオオオツ……!!」

しかし、怪人は意に介さない。

喜悦を上げながら、絶頂中の膣へ執拗にピストンする。

「お陰でたっぷり出そうだぞ……オレの触手は人間の肉棒と同じで、快楽が頂点に達すると反応が起こるのだ……さあ、存分に食らえ……敵の汁を……穢れた体液を正義のヒロインマンコでたらふく吞めっ……これがお前を破ってイカせた最強怪人の汁だッ……！」

とどめとばかりに打ち込まれた刹那、触手全体が切迫感を孕んで小刻みに震えた。子宮口に食い込んだ先端の震幅は特に大きい。そうして一回り大きくなった次の瞬間、大量の粘液を吐き出した。

「ひいやあああああ~~~~~~~~！ う、うううそ……しゃ、しゃしゃしゃせい!! ……

そんな……あ、あたし、かいじんにっ、ちつないしゃせいされちゃつてるう!!!」

そうとしか思えない現象だった。

しかも、汁は恋人の精液よりもずっと高品質と言うしかない。

子宮口に密着する先端から打ち込まれる度に、膣どころか頭の芯まで揺すぶられる。それほど重くて大きな塊なのだが、さらにはお湯のように熱い。火照った女壺の隅々を、さらに高温の汁で灼き尽くされると、うっとりするほどの被虐感を覚え、もっと欲しいとばかりに淫猥に腰をくねらせてしまう。

（いやあ……やめてよお……こんなすごい汁を中出しされたら、これも覚えちゃうっ!!!）

スキンつきとはいえ、自分とのセックスで恋人に射精してもらうのは嬉しかった。

身体で味わう精液の感触も愛しくて仕方ない。



しかし怪人の吐精は、そんな温かい思い出さえも打ち砕いていく。

変身ヒロインの身体は、恋人ではなく、怪人にされる射精が最も素晴らしいと認識し始めている。そうとしか思えないほど、肉体は陶酔の境地に押し上げられている。

恋人のペニスよりも怪人の触手。大好きな男子の精液よりも敵の体液。

もしもこの先、彼とセックスする時があっても、これまでのように悦べない気がする。自分がより深く満足できたのは、彼との愛の営みではなく、拘束されての触手責めなのだから。

恋人と交わっても、満足するどころか、くだらないと思ってしまうに違いない。

「ら、らめっ、もう出さらいで、ああっ、ラメ、またくりゅう、にゃか出しされながらイッちゃふうううッ……!」

そんな女になるなど絶対に嫌だった。

今まで感じたことのない大きな恐怖と快楽におののいていると、身体が浮き上がっていき感覚になる。

ふみなは本能的に直感していた。

ビクンビクン震える触手に、恋人よりも高品質としか思えない精液を膣内射精される快感で、自分はまた絶頂してしまうのだ。

「これもおぼえちゃうっ! もうおぼえたくなんかにゃいのに、おぼえちゃうう!!!」

垂らした目尻から法悦の涙をだくだくだ流しつつ、変身ヒロインは二度目の絶頂に震える。



「ウツウツウツ！ オレが出してる汁は、スーツを溶かした粘液を濃縮させたものだが、随分と気に入ってくれたようだな、キューティウインド」

これでもかと言わんばかりに、しつこく射精しながら怪人が言ってくる。

「オレもいい気分だ。しもべ仲間を倒し、オレにも挑んできた小生意気なお前の柔肌を蹂躪し、自慢の触手でイカせる。そのイキ顔は、普段からは想像できないほど無様でしかも扇情的……ムウア様より仰せつかった使命——お前の抱き心地の確認を果たせたこともあるが、実に気分爽快だぞ……敗れた仲間たちは草葉の陰で悦んでいることだろう……！」

「はあ、はあ……ゆうと……ごめんなさい……ああつ、あつ……あああ、はあつ」

恋人への罪悪感と、自分は穢れてしまったという汚辱感で、戦意はすっかり萎えていた。女に生まれた悦びと恨みを同時に覚えながら、変身ヒロインは触手に犯され続ける。

マダコ怪人の大きな目が拳を睨んだのがはつきり見えた。

宣言したようによけるつもりはないようだが、見切ってはいるらしい。

しかし、最初から当てるつもりはなかった。

正面から挑んだのは、相手の注意を惹きつけるためではない。

パンチを寸止めたキューティウィンドは、すかさず背後に回り、十六本の腕が生える

根元——マダコの口がある場所——を蹴り上げた。

「タアアアアアア！」

即座にジャンプした変身ヒロインは、真横のビルの屋上を尻目に、垂直に吹き飛んだ怪人を殴りつける。アスファルトにうつぶせに叩きつけられた怪人は、蜘蛛の巣状のひび割れの中心でごろりと仰向けになった。

人間に似た大きな目が、嘲笑する風に笑っている。

（やっぱり、まるで効いてないみたい……軟体動物だからなの？ 蹴ったときも殴ったときも、手応えが前回の骨のない奴とそっくりだったものね……だったら、これはどう！）

ビルの横で滞空するキューティウィンドが、勢いよく両手を突き出す。

不意を突いて蹴り上げたあと、空中で地面に叩きつけるのは、余計な被害を出さないで本命に当てるための下準備。本当の攻撃は、これから繰り出す技なのだ。

「よけないって言ったんだから、受けなさいよね！ 青き風に吹かれて凍れ、邪悪な心フリーズ・テンペスト！」

敵を凍えさせる力の奔流が怪人に殺到する。

「直撃……やったわ！ それじゃ、とどめを……」

「マゝダマダマダマダ！ 最強のオレにこんなものは、つう〜じ〜ンッ！」

獣が吠えるように叫んだ怪人は、胴体のでっぺんだけで倒立した。

十六本の腕が、さながら扇風機の羽のように回転し始める。

キューティウィンドが放った奔流は回る腕の手前でせき止められ、ほどなく消えた。

「うそでしょ……効かないなんて……!!」

「どうだ？ 宣言通り、オレはよけなかつたぞお？」

怪人は数メートル先に着地したキューティウィンドを睥睨する。

「くっ、どうということなのよ……頼りのあれが通じないなんて……」

変身ヒロインが歯噛みしながら呟くと、カチューシャの通信機から母の声が聞こえた。

「説明するわ。自分が持つ【アトランティスの力】を高いレベルで放出しながら腕を回転させて、自分の周囲に空気と力の壁を作ったのよ。それに遮られてしまったの」

強力な技が防がれたというのに、久しぶりに聞く母の声は、それほど沈んではいない。

「ひょっとして、作戦があるの？」

「当たり前だ。絶望なんかするなよ、キューティウィンド。勝機はあるんだ」

「あらあら。そこまで言うなら、ゆうくんに任せるわ。おばさんは引っ込んで、ふたりの共同作業のお手並みを見せてもらおうわね」

割り込んだゆうとにおどけた口調で言った母は、それきり黙り込んだ。

「ありがとうございます、ママさん……いいか、キューティウィンド。勝ち方は前のウツボカズラの奴と同じで、フリーズ・テンペストで凍らせて、浄化するんだ。あのお化け植物と同じような身体なんだから、浄化技だけではどうやっても倒せないだろう。だから、凍らせる必要がある。それで、凍らせる方法は——」

彼のアドバイスは最後まで聞けなかった。耳障りなノイズに襲われたのだ。

「サシの勝負の最中だぞ。お喋りするなど、骨のない真似はするんじゃないッ！」

「くっ……ウツボカズラの奴みたいに、力で通信を妨害しているのね……ハッ！」

睨んだ次の瞬間、怪人の姿が消えた。

居場所に気付いたときには遅かった。背後に回り込んだ敵は、その吸盤だらけの長く太い腕で、ロンググロープの両手も、ニーハイソックスの両足も搦め捕ってしまふ。

「諦める！ お前の最強技を破ったオレに勝とうなどと、タコなことを思うんじゃないっ」

「このおっ！ 離しなさいよ！」

逃げようともがくが、無駄だった。自分を拘束する力は猛烈だ。

その上、両手足の関節に食い込みながら巻き付いているせいで、力が出しにくい。

抜け出そうと身じろぎする変身ヒロインを、怪人は軽々と持ち上げた。

胸元を空に向けて突き出させる、エビ反りの体勢に固めると、カメラの群れへと飛ぶ。

「お前らはマスメディアだな？ これからいい画を撮らせてやる。キューティウィンドの

お宝映像だ。お茶の間にしつかり届けるんだぞ」

「ちよつとあんた！ どういうつもりよっ」

抱え上げられているキューティウィンドが怒鳴る。

どうやら敵は、ウツボカズラの怪人のように自分を陵辱する気らしい。

しかも、テレビで流せと言っているのだ。

「これはムウア様のご指示なのだ。そのために人間どもが集まるように仕向けた」

「なんて悪趣味な……思い通りにはならないわよ！ くっ……このおっ」

啖呵を切り、逃れようともがくが結果は変わらない。

それでもキューティウィンドは諦めず、抵抗を続ける。

「フン！ お前の意思などどうでもいい。オレは勝手にするまでだ」

青空に向かって拘束されている変身ヒロインがもがくのを尻目に、怪人が嘲笑する。

「私たちを甘く見ないでほしいわね。たとえ殺されたって、協力してやるものですか！」

挑戦的に断言したのは、ふみなの友だちの姉で、最初の戦いに居合わせた、あの女性レポーターだった。

「キューティウィンドは平和のために戦ってくれる人類の恩人よっ。彼女を売ってまで、助かりたいとは思わないっ。たとえ製作期間が短くても、予算がぜんぜん足りなくても、ねつ造ややらせなんか逃げないできた私たちのマスコミ魂を甘く見ないことね！」

「勘違いするな。さつきはああ言ったが、逆らっても殺しはしない。そういう命令を受け

ているからな。オレがするのは、お前たちの機材を奪って放り投げるだけだ……うつかり落としてしまった。そんな程度の衝撃を機器に与えることだけなのだよ」

「え？」

「跡形もなく壊せば、オレに破壊されたという言い訳がすんなり通るだろう。社内や世間の同情もあるかもしれない。だが、オレに壊されたか、不注意で壊したか判断がつかない壊れ方だったら、責任を取らされるのではないか？ 損害賠償という形でな。そのほうが、会社にとって得だからなア」

「くうっ……その通りだわ……この化け物、妙に世間ずれしてるじゃないの」

「人間の記憶を奪ってきたのは伊達<sup>だて</sup>ではない。お前たちのメンタルを調査していたのだ……死ぬのは一瞬。しかし、職を失い、これまでの生活を失うのは、死ぬよりも苦しい生殺し。お前たちには家族がいるのだろう？ 自分の都合で苦しめていいのか？」

「……選択の余地はない、か……やると決まれば徹底的にやるまでよ……でしよ、皆！」

「……おう！……」

女性の問いかけに、周囲の人間が威勢よく返事をする。

「大変なことになってしまいました！ 勇戦空しく、私たちのキューティウィンドが大ピンチです！ できがきつと、逆転してくれることでしょう。私たちマスコミユニケーションは彼女を信じ、お茶の間の皆様と共に、見守っていききたいと思えます！」

「うう……今話を聞かされたら、怒るに怒れないよお……」

本気で仕事を始めた周囲の様子に、キューティウィンドがうなだれる。

「現代の人類など、多かれ少なかれこんなものだ。故に、自身と未来を蝕んでいることに気付かず、あるいは目を背ける。だから、星を穢す害虫であり続ける」

「なんの話よ？」

「それを語る舌は与えられていない……オレは役目を果たすのみッ！」

くわつと目を見開く怪人。タコ足が動く。

蹴ったり殴ったりした際の触れ心地や、拘束されている手足に伝わる感覚からすると、身体作りは本物のマダコと同じらしい。

筋肉の塊でゴムのような弾力を持ちつつ、肉の触感を備えている。

足に巻き付くそんな腕が、ゆっくり左右に開いていく。

「!? ぐぐぐぐぐつつ……ダメ、止まらない……!!」

自分がされていることを理解したキューティウィンドは、思い切り力を込めた。

いくらスカートを穿いても、大勢の人間の視線だけでなくテレビカメラまで向けられているのだ。足を広げるなど恥ずかしくない。

「オレの拘束は完璧だ。ただでさえ、人間の骨格や筋肉にとって不自然な体勢なのだ。しかも仲間の中で最高の力を誇るオレに対し、お前は普段の十分の一も力を発揮できない。頑強なアワビがタコにこじ開けられるように、なすがままになるしかないぞッ！」

豪語する怪人は、変身ヒロインの健気な抵抗をねじ伏せて、大きく足を開かせてしまう。

「おお……ニーハイストッキングのムチムチ太腿美脚があんなにはしたなく開いてるっ」

「スカートで奥が見えなくても、十分刺激的なポーズだぜ」

「オッパイすげえ……大きい上に、仰向けでもぜんぜん流れてねえぞ……」

戦いを遠巻きに見物していた観衆が騒ぎだした。

侵略者に唯一勝利してきた者であり、うら若き乙女の痴態に我慢できなくなったのか。

十代後半から三十代くらいの男性たちが近づいてきて、円く人垣を作っている。

視線が集中しているのは、中央のキューティインドだ。

青空に向かって二メートルほどの高さを持ち上げられている敗北ヒロインを、劣情を宿

す瞳で見詰め、あるいはケータイやタブレットを使い、静止画や動画を撮影している。

「ちよつと、見ないでよ！ 脅されたマスコミの人たちはしようがないけど、あんたたちは

野次馬でしょ！ このタコ怪人が恐ろしくないの？ 殺されちゃうかもしれないわ

よ！」

キューティインドは怒鳴りつけるが、怪人が遮る。

「オレの狙いはキューティインドただひとり！ 他の人間はどうでもいい。可能な限り

殺生はするなどのムウア様のご命令もある。好きなようにするがいい、人間どもよ！」

「『『『おおおおおおお!!!』』』」

そこかしこで歓声上がる。どうやら、怪人の言うことを真に受けたらしい。

「くうっ……女の子をなんだと思ってるの？ ……これだから男子は………身体が自由





ならぶん殴つてやるところなのに……!!」

変身ヒロインは首を巡らせ、恥知らずな男たちを睨み付ける。

「うはっ! そんな姿でも気丈な姿は萌えるなあ!」

「マダコティス氏、そろそろ続けてくださいよ!」

「よかろう……次はやはり……二番目に視線を集める乳房か」

怪人が新しい腕を伸ばしてきた。

胸元の左右から伸びてきた腕は、横乳に張り付くと、勢いよく外側に引つ張る。

ビリーイイツツツ!

「きゃああつ! どうして? なんで、こんなにあつさり破れるのよ!」

胸元の衣装を引き裂かれ、裸の乳房を露出させられた変身ヒロインが呻く。

仰向けでもロケット型を保つ巨乳は、衣服を裂かれた振動で左右にブルブル震えたが、やがて落ち着く。

「オレの腕……いや、腕触手は、お前のスーツを溶かしたウツボカズラティスの粘液を分泌させられるのだ。スーツに張り付いたとき、触れた部分から汁を出した。そうして脆くなったあとなら、この通り簡単に破くことができる!」

「嘘でしょ、そんな都合のいいことってあるの!? それに、コスチュームを溶かされたことをどうして知っているのよ。密室だったから、外からは見えなかったはずよ。その場で浄化したんだし、仲間のところに戻って知らせたというのもありえないっ!」

「簡単なことだ。奴に限らず、オレたちしもべは全員、星の生物とムウア様の分身体……いやあの方の力と記憶を宿した細胞が、フード姿の人間になったものと融合した存在。故に、しもべが奪った人間の記憶や見聞きしたことは、時間差なくムウア様も体感される。そのため、奴が消されたあとに生まれたオレも、記憶を共有しているのだ」

露わになった美巨乳に男たちが興奮する中、怪人が淡々と説明する。

「疑問は解けたか？ ならば、心置きなくオレにやられろ」

剥き出しになった白い豊胸に、四本の赤い腕触手が伸びる。

先細りしても公園の遊具の鉄棒くらい太さがある肉紐は、吸盤がついていない先端部で、瑞々しい乳房のそこかしこを突いてくる。

「うっ……やだ……気持ち悪い！」

弄ばれる悔しさで歯を食いしばりながら、右へ左へと胸元を揺らす。

精一杯逃れようとしても、やはり触手の拘束は解けない。一方的に玩弄されてしまう。

ぬるっ……ぬちゅうっ……ぬるっ、ぬるっ、ぬるっ……ぬろおおお……。

怪人の愛撫は、先端を深々と突き刺すだけではなかった。

深々と刺したあとに力を抜き、乳房の弾力にわざと弾かれ、また貫いてくる。

かと思えば、深く突き刺した状態で、ケータイのマナーモードのように総身を激しく震えさせ、豊胸の芯から揺すぶってくる。

「んっ……はあう……あうう……あうう……いや……胸が……」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラブ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!





あなたのキモチイをお手伝い!

# キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!



電子書籍も配信中!

## D☆REAM GAZON

2D DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



大人気PCゲームのコミック多数連載!



## コミック UNREAL

# ヒロインピンチDX

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、ダウンロードサイトなどで好評発売中!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。